

市内の戦跡を歩く5

沖縄戦終結から66回目の夏を迎えます。沖縄戦終焉の地である糸満市には、百三十基近くの慰霊塔・碑が建立されています。これらの慰霊塔・碑には碑文だけでなく、遺族や関係者の悲痛な思いなどをあらわした歌や句が添えられているものもあります。今年の「市内の戦跡を歩く」では、歌碑や句碑に込められた思いに触れながら戦跡を歩いてみます。

これまでの過去4年分の「慰霊の日特集」記事は、糸満市のホームページでご覧になれます。沖縄戦当時の糸満市についてお知りになりたい方は、『糸満市史 資料編7 戦時資料上巻』、『同下巻』（生涯学習課文化振興係で発売中）をご利用ください。



① 白梅之塔



て、終戦間もない1947年1月に建立された。塔はその後、二度建て替えられた。現在の塔は1992年6月に建てられたものであり、当初の塔はその傍らに寄り添うように立つ。

所在地は字真栄里1837番地。国吉集落の南東約650メートル。県道250号線沿いに標識がある。近くに国吉区民が建立した「萬魂之塔」がある

散りてなほ 香りは高し
白梅の花

沖縄戦で戦没した県立第二高等女学校の生徒、職員、同窓生を祀る。沖縄戦では、生徒達は八重瀬岳にあった第二十四師団第一野戦病院に配属され、負傷兵の看護などにあたった。

冒頭の句は、当初の「白梅之塔」の裏に刻まれている。この慰霊碑は近くに住む二高女の卒業生や在校生、糸満高校国吉分団の男子生徒数人と1人の石工によって、

② 沖縄陸軍病院之塔



春くると ひたすら待ちし 若草の
萌え立ついのち 君は捧げぬ
水波みに 行きし看護婦 死ににけり
患者の水筒 四つ持ちしまま

山城集落の東側に、地元住民が避難していたサキアブとよぶガマがある。沖縄戦末期、南部に撤退してきた陸軍病院の本部の勤務者が、ここで傷病兵の治療にあたったことから陸軍病院本部壕ともよばれる。近くに沖縄陸軍病院勤務の関係者43名を祀る慰霊塔が立つ。冒頭の二首は陸軍病院の軍医であった長田紀春氏が詠んだもので、歌碑は沖縄戦終結から60年を経過した2005年6月に塔の側に建立された。

所在地は字伊原279番地。伊原の国道331号沿いにある（株）琉球漆器の近くに、所在を示す標識がある。道標に従い南へ約600メートル

③ ずるせんの塔



この道も この岩肌も 乙女らが
弾にたたかれ 踏み惑ひしところ

瑞泉学徒隊は県立首里高等女学校の生徒たちによって編成された学徒隊の通称で、塔は戦没した生徒・職員・同窓生を祀っている。生徒らは沖縄昭和女学校の生徒らとともに、第62師団野戦病院に配属され、負傷兵の看護にあたった。

所在地は米須1137-1。国道331号の米須（西）交差点側の「ひむかいの塔」の南隣

④ 梯梧之塔



いたましく 二八に散りし 乙女らの
血潮に 咲ける ぐれないの花

沖縄戦で戦没した私立沖縄昭和高等女学校の生徒、職員60人を祀る。梯梧学徒隊の名称は、校歌の「梯梧の花の緋の誠」にちなむ。生徒らはナゲーラ壕（現南風原町新川）にあった第62師団野戦病院配属。5月下旬、負傷兵らとともに南部に撤退。6月上旬、激しい砲撃のなか武富、米須を経て伊原に到着。6月19日に解散命令が出た。この塔は1950年に那覇市崇元寺の旧校舍跡に建立されたが、1971年6月に、現在地に移設された。

所在地は字米須1948-2。ひめゆりの塔の東隣

⑤ 魂魄の塔



和魂と なりてしづもる おくつきの
み床の上を わたる潮風

魂魄の塔は金城和信真和志村長の呼びかけにより、戦後最も早くつくられた慰霊塔である。合祀者数3万5千人は県内最大である。毎年、6月23日の慰霊の日には県内各地から多くの人々が参拝に訪れ、終日香煙が絶えない。この歌は、遺骨収集と塔の建立に協力した糸満高校真和志分校校長の翁長助静氏によるものである。当初この歌は、塔の裏に刻まれていたが、長い年月を経て風化し読み取ることができなくなったため、1995年6月、当時の教員たちによって新たに歌碑が建立された。

所在地は字米須1446-1。国道331号沿いの「ひむかいの塔」交差点南に約1キロメートル

⑥ 島守の塔



ふるさとのいやはて見んと 摩文仁山の
巖に立ちし島守りのかみ

島田徹沖縄県知事、荒井退造警察部長ほか、県庁職員469名を祀る慰霊塔である。島田徹知事は、1945年1月に沖縄に赴任。疎開業務や食糧の確保などに着手。沖縄戦まった中の5月下旬、知事以下県庁職員は南部の壕を転々とした。6月下旬、知事は摩文仁の軍医部の壕を出た後行方を絶った。

所在地は字摩文仁641-1。平和祈念公園内。「平和の礎」の南西側

⑦ 金城勝の追悼碑（仮称）



三年にわかれし 君したひ 父ははるばる
かえれ共 君はこの世に いでまさず
護国のはなと ちりしとや

平和祈念公園内の「島守の塔」のすぐ側に、ひっそりと立つセメント造りの小さな碑。1952年にブラジルから一時帰国した真壁出身の金城栄太郎氏が、沖縄戦で戦死した息子の勝のために建立。父栄太郎は勝が数え3歳の時にブラジルに渡り、沖縄戦当時の金城家は、父と長男・二男がブラジルに、三男が本土、母と四男の勝は沖縄と、海を隔てて暮らしていた。沖縄工業学校に在学していた勝は、沖縄戦で学徒として通信隊に配属され戦死した。

所在地は字摩文仁の平和祈念公園内。「島守の塔」の敷地内の階段を上って右手奥